

感性と知識・技能とを融合させる活動を通して、 自らの感じ方を広げ、深める音楽科の学習

I 音楽科研究の方向性

1 主題設定の理由

音楽科においては、音楽のよさや楽しさを感じるとともに、思いや意図をもって表現したり味わって聴いたりする力を育成すること等に重点を置いて、その充実が図られてきました。新学習指導要領においては、感性を働かせ、他者と協働しながら音楽表現を生み出したり、音楽を聴いてそのよさや価値等を考えたりしていくこと等についてさらなる充実が求められています。

前研究では、「音楽の捉え方を自分なりにもち、思いや意図を明確にして、豊かに表現する音楽科の学習」をテーマに研究を進めてきました。音楽表現への思いや意図を明確にすることで、児童は音楽の学習に意欲的に取り組み、音楽を学ぼう、吸収しようという主体的な姿が見られました。また、音楽フェスティバル等の行事においては、生き生きと表現したり、他学年の表現を味わって聴いたりする姿が見られ、音楽を純粋に楽しむ態度が育ってきていると考えます。前研究の成果や本校の児童のよさを更に伸ばすためには、学習過程に工夫を加え、楽しむ質を向上させたり、音楽を身近に感じさせたりすることが大切であると考えます。

全体研究では、「探究する子どもを育てる教育活動の創造」をテーマに、「自ら『問い』を見だし、その解決策を模索し続け、遂行する力を身に付けた姿」を目指しています。上記の研究の成果や児童の実態を踏まえながら、探究する姿を音楽科で具現化すると、「音楽表現を試し、よりよい音楽になるにはどうしたらよいか考える姿」「音楽を聴いて感じたことの原因を探る姿」「感性を働かせ、他者と協働しながら、『音楽表現』『音楽のよさ、価値』を追求する姿」「(その過程を経て)自分なりに音や音楽と豊かに関わる姿」などの姿であると想定します。

以上を踏まえ、研究主題を「感性と知識・技能とを融合させる活動を通して、自らの感じ方を広げ、深める音楽科の学習」と設定しました。「感性と知識・技能とを融合させる活動」とは、「思考力・判断力・表現力等」に関する内容と「知識及び技能」に関する内容を、行きつ戻りつしながら相互に関連させ、活動を進めるということです。「思いや意図」「よさや価値」という「思考・判断・表現」と関わらせながら、「知識及び技能」を育成していくことで、「思考・判断・表現」の幅が広がったり、質が高まったりしていきます。「自らの感じ方を広げ、深める」とは、自分なりに音や音楽と豊かに関わる姿を具体化したものです。他者と協働しながら、「音楽表現」「音楽のよさ、価値」を追求することで、音や音楽の感じ方を広げることを目指していきます。また、音や音楽を身近に感じたり、知識及び技能を生かし、音楽と言葉を往還したりすることで、音や音楽の感じ方を深めることを目指していきます。

2 目指す児童の姿とその具体

自らの思いを大切にしながら、「音楽表現」や「音楽のよさ、価値」を追求する児童

「自らの思い」とは、「こういう表現をしたい。」という意図や、音楽を聴いたときに感じた思いです。「自らの思い」を大切にすることが、探究的な学習の原動力になります。

「『音楽表現』や『音楽のよさ、価値』を追求する」とは、「自らの思い」を実現するような表現活動に取り組んだり、「自らの思い」の理由を考えるような鑑賞活動に取り組んだりすることです。「知識及び技能」を生かし、協働的に追求することで、自らの感じ方を広げたり深めたりできるようにしていきます。

Ⅱ 研究内容の具体

1 感性と知識・技能とを融合させる題材構成の工夫

児童が自らの感じ方を広げたり深めたりし、音や音楽と豊かに関わるためには、題材を通して、児童がもつ感性を、知識・技能と融合させて学ぶことが大切です。そのためには、「何を感じさせ、何を考えさせるのか。」という視点で、題材を構成していくことが大切です。ここでは、感性と知識・技能とを融合させながら学ぶための題材構成の工夫について明らかにします。

○題材を通して感じさせたいこと、考えさせたいことの焦点化

- ・題材で扱う〔共通事項〕を焦点化する
- ・系統性を踏まえる 等

○表現領域と鑑賞領域の関連を図る。

- ・〔共通事項〕で2つの領域をつなぐ
- ・表現領域と鑑賞領域の組み合わせ方を考える 等

○感性を育む活動の工夫

- ・体を動かしながら感じる
- ・他者の感じ方を知る
- ・本物にふれる 等

2 「音楽表現」や「音楽のよさ、価値」の追求を支える指導の工夫

児童が自らの感じ方を広げたり深めたりしていくためには、音や音楽と出会ったときの自らの思いを大切にしながら、「音楽表現」や「音楽のよさ、価値」を追求していくことが大切です。追求していく中で、「知識及び技能」を身に付けたり、他者と協働しながら学んだりすることで、児童は自らの感じ方を広げたり深めたりしていきます。ここでは、児童の「音楽表現」や、「音楽のよさ、価値」の追求を支える指導の工夫について明らかにします。

○曲想と音楽の構造などとの関わりについての理解につながる「問い」の工夫

- ・「どのくらいの声の大きさが合うかな。」
- ・「どうしてこの部分は曲の中で最も盛り上がる部分と感じるのかな。」 等

○音楽表現を楽しんだり、表したい音楽表現をしたりするために必要な技能を習得させるための指導

- ・範唱（範奏）をよく聴き、繰り返し模唱（演奏）する。
- ・体の動きを伴った活動や互いに聴き合ったり声や音を合わせたりする活動を通して、音楽表現の楽しさや喜びを味わい、自らの表現のよさに気付く。 等

○比較する場、関連付ける場の設定

- ・どちらの演奏の仕方がよいか考える。
- ・曲の始めと終わりの違いを考える。 等

○児童同士の感じ方や考え方を結び付け、共有・共感する場の工夫

- ・友達の動きを真似して理由を考える。
- ・それぞれの生活経験と結び付けながら話し合う。 等

○教える場面と考えさせる場面の設定

- ・1番で学んだことを生かしながら、2番をどのように歌えばよいか考える。 等

3 学習したことの意義や価値を実感させる評価の工夫

児童が自らの感じ方が広がったことや深まったことを実感することで、次の音楽の学習に向かうエネルギーが湧いたり、生活の中の音や音楽と関わらせたいという思いが強まったりすると考えます。ここでは、学習したことの意義や価値を実感させる評価の工夫について明らかにします。

○感じ方を広げ、深めている児童の姿（A）を描く（＝資質・能力の明確化、具体化）

○Aと比較して、資質・能力を見取り、指導に役立てる。

- ・記録に残す評価と指導に生かす評価の題材における使い分け
- ・見取ったこと（指導に生かす評価）を、即時的なフィードバックに生かせるように、ICT機器を活用する。 等

○題材の始めと終わりの変化を提示し、学習したことの意義や価値を実感させる

- ・ワークシート
- ・動画
- ・音声ファイル
- ・発表会 等

< 1年次研究の重点 >

- ・感性を育む活動の工夫
- ・曲想と音楽の構造などとの関わりについての理解につながる「問い」の工夫